

談話における現代中国語の人称代名詞「人家」に関する研究

任, 暁雪

<https://doi.org/10.15017/4060253>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (学術), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

| | | | | |
|--------|-----------------------------|--------|-----|--------|
| 氏名 | 任 暁雪 | | | |
| 論文名 | 談話における現代中国語の人称代名詞「人家」に関する研究 | | | |
| 論文調査委員 | 主 査 | 九州大学 | 教授 | 山村 ひろみ |
| | 副 査 | 九州大学 | 教授 | 松村 瑞子 |
| | 副 査 | 九州大学 | 准教授 | 劉 羸 |
| | 副 査 | 麗澤大学 | 教授 | 井上 優 |
| | 副 査 | 下関市立大学 | 准教授 | 秋山 淳 |

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

現代中国語における人称代名詞としての「人家」には、旁称用法、3人称用法、1人称用法があると言われるが、このような「人家」の諸用法と、同じく「旁称」と呼ばれる人称代名詞「別人」、3人称代名詞「他」、1人称代名詞「我」との異同についての詳細な研究はほとんどない。また、「人家」には他の人称代名詞には見られない感情表出機能があると言われるが、その機能の緻密な分析もほとんどない。さらに、このような「人家」の特徴を統一的な観点から研究したものは皆無であった。本論文は、そのような先行研究の問題点を解決すべく、東郷(2000)の提唱する「談話モデル理論」を基に、人称代名詞として用いられる「人家」の諸用法を統一的に説明し、他の人称代名詞との相違を解明することを主たる目的としたもので、以下の構成からなる。

第1章は「序論」で、本論文の背景、目的、方法および本論文で用いる表記法について述べた。第2章は「先行研究概観」で、「人家」の通時的観点からの先行研究、現代中国語における人称代名詞「人家」に関する先行研究を概観した上で、従来の研究の問題点を指摘し、本論文の課題を提示した。第3章では、現代中国語における人称代名詞「人家」の観察を行った。まず、人称代名詞「人家」の諸用法を確認し、観察のための方法、資料体について述べた。次に、東郷(1999)の「直接指示」と「間接指示」の観点から、「人家」の各用法と典型的人称代名詞の異同を観察した。また、これまで指摘されることがなかった「人家」の用法を指摘し、それを「人家」の「関連対象喚起」用法と名付けた上で、その特徴を明らかにした。第4章では、「人家」を扱うには談話レベルの考察が必要な理由を述べた上で、本論文が用いた理論的枠組み、東郷(2000)の「談話モデル理論」およびその基本的な用語・概念について説明した。第5章では、この理論的枠組みに従い、人称代名詞「人家」の諸用法を統一的に説明すると同時に、第3章での観察結果に基づき、「人家」の各用法の実態および諸用法に対応する典型的人称代名詞との異同を分析した。第6章では、本論文が資料体として用いた『中日対訳コーパス』に出現した「人家」に対応した日本語の形式を整理し、「人家」に対応する頻度が高かった日本語の「ひと」と人称代名詞「人家」との機能的異同を明らかにした。そして、終章の第7章では、本論文の結論として第2章で提示した本論文の課題に対する回答を示し、最後に今後の課題を述べた。

以上の結果、本論文は、現代中国語の人称代名詞の「人家」は「間接指示」表示専用の形式であること、また、その指示にあたって東郷の「談話モデル」の「共有知識領域」を必ず経由するという点において 3 人称代名詞「他」、1 人称代名詞「我」と異なること、さらに、そのメトニミー機能に由来する「関連対象喚起」という特別な用法を持つ点において旁称の「別人」とも異なることを明らかにした。これらはいずれも先行研究では指摘されることのなかったものであり、今後当該分野の発展に大いに貢献することと思われる。したがって、本論文は博士（学術）の学位に十分値すると認められた。